



武内カズノリ(1953-)、ステップス初個展である。武内は今回、昨年から突如自己の中に立ち現れてきた作品群《Bottchi》(セラミック)を画廊内に大型四体、事務所と入口に小品を計六体展示した。出品したのは《Bottchi》だけではない。画廊内は《路傍の石》(セラミック)一体と《気候変動と温暖化に解け行く街並》(ステンレス)四体によってインスタレーションが施されている。事務所には《崖っぷちの形1》が《Bottchi》に混ざって展示された。Bottchiとは落花生を収穫して畑に天日干しにする、野積みされた塔のことで、千葉で呼称される。武内は「無念の思いで亡くなった人々に捧げるレクイエム」のために制作しているという。《Bottchi》は仏にも古代の兵士にも見えるが、重要なのは顔の形ではなく「表情」である。その表情は情感などという俗世界から離脱しながらも、神のような普遍的世界を目指していない。百人百様の、人間の生き様を徹底的に尊重する。そして人間という枠すら超え、野積みの塔でも彫刻でもない存在になっている。

それは人間が生み出したのではなく、無論神でもなく、自然現象で偶然出来上がってきたのではないかと錯覚する。ここでいう自然には、人間も含まれている。すると、人間の営為とはちっぽけなものではなく雄大な存在価値が生まれてくる。ちっぽけな存在でも、生きる意味があるのだ。この一体だけで十分にヘビーであるにも関わらず、武内にとって重要なのはステンレスが床に映し出す光であるという。アンダーグラウンドを照らす光。ステンレス自体も作品であり、勿論我々の顔も写り込む。壁面を越え、事務所と入口の作品とも呼応する。その叫びは、画廊を突破し全世界に響き渡るだろう。

